

==== 目次 =====

- P1
今号の TOPICS
できる人が、できる事を、
できるだけ
- P2
2班 芦生の森を歩く
1班 自然と文化で学ぶこと
- P3
4班 北雲雀きずきの森
3班 自然と文化科に入会して
- P4
自然と文化科誕生
人生の岐路での出会い
- P5
自然観察の不思議
ナラメリンゴフシ
斑入りのユリノキの不思議
- P6
俳句サロン
絵・写真・工作

=====

◇自然と文化だよりの特質化
従来主要行事予定をお知らせしていましたが、ホームページの更新の定常化に伴いホームページでタイムリーな行事予定を見ていただき、「自然と文化だより」はもっとアットホーム的な情報交流の場にしていきたいと計画しています。今年度の特集として、専任幹事の方々の抱負、自然と文化科設立時の裏話、リレー随筆、趣味のページなど充実しますので、楽しみにしてください。

=====



=====

今号の TOPICS

「できる人が、できる事を、できるだけ」

企画専任幹事 柳生 和嘉

80 名以上のグループが自然観察であれ、歴史・文化散策であれ、同一行動を取るには食事やトイレの場所の確保を考えねばならず、路線バスの利用や市街地の大勢の歩行も地域の住民に迷惑を掛ける事になり、そのための下見や組織を運営する仕事も増加します。これ以上科員が増加すれば上手く運営できないのではとの懸念もあり、昨年「新体制検討委員会」を中心に議論されましたが、明確な結論を出すこともできず新年度を迎えたところ、予想した大幅な増加は無く従来通りの体制で進める事が可能で、表向き問題はありませんが対策は先延ばしした形になりました。全体の雰囲気である「来るものは拒まず、去る者は追わず」に対して、今年は色々な形の企画を練り、実践しながら新しい運営方法を模索する重要な 1 年となります。

私は昨年、自分の今後の事を考えぼちぼち地域の地域に貢献する時期と考え、地元のいろいろなサークルにビジターとして極力参加し相性の良さそうなグループを探しました。様々な形態があり、それにより運営方法もそれぞれですが、概して大人数になるほど会の取り決めが多くなっています。

そのなかで、通常 20 名程度が参加する自然観察会は毎月の会報に観察報告と次月の予定が乗っており、集合場所に行くだけで路線バスも気兼ねなく使い、珍しい場所にも案内してもらえます。会員それぞれが皆に紹介したい場所と時期を提案しその調整を会長がやるだけなので事務処理は簡単です。提案者が担当になりますから下見は不要ですし、仮に花の時期を確認するため下見をしても自分の庭のようなもので苦痛にはなりません。会員の皆さんが「できる人が、できる事を、できるだけ」を実践しているわけです。このように 20 名程度の活動は無理や義務や煩わしさもなく、和気あいあいかつ意欲ある理想の集団の様で、「自然と文化科」も利用できそうです。

「自然と文化科」の今年の活動には、21 名の班で企画し班で行動する「班別活動」を多く取り入れて、科員が増加した場合の解決策の一つになるかどうか検討していきたいと思います。



(工作同好会の作品から)

芦生の森を歩く

2班 藤川 宗昭

5月17日～18日に高等科8期の有志18名で芦生の上谷・杉尾峠コースを歩いてきました。

最初の日、トロッコ道と櫃倉谷にわかれて散策しました。翌日は朝6時からバードウォッチング。朝外へ出てみるとみんながスコープで何かのぞいています。森の王様クマタカです。真っ青なオオルリも木の上にとまっていました。お目当てのアカショウビンは残念ながら声だけでした。

長治谷を出発し、野田畑湿原を抜けると天然林に入り、芦生スギ、トチノキ、サワグルミ、オニグルミ、ミズナラ、イタヤカエデが続きますが森の中が非常に明るく、地面には落葉ばかりで緑がなく、生えているのはバイケイソウ、サンヨウブシ(トリカブト)、テツカエデの幼木、アシュウテンナンショウ等で、シダやコケも見当たりません。

なぜか違和感を感じました。数日前にテレビで見た「芦生の森に万物やどる」という平成元年5月の番組の再放映を見て先入観があった所為だと気付きました。20年前の下谷、上谷には緑にあふれていました。背丈以上のクマザサの中を進む場所もありました。湿地の中も青々と茂っていました。10年ぐらい前から鹿が増え、下草や幼木を食べてしまったという説明でした。杉尾峠に近付くとブナの森になり実生もたくさん見られ若木も育っていました。

いよいよ杉尾峠の登りに入り川幅も急に狭まり、ちょろちょろとした流れがやがて落ち葉の中に消えたところが由良川の源頭です。源頭からすこし登ったところが杉尾峠です。芦生ではめったにない快晴となり峠からは若狭湾に浮かぶ冠島がよく見えました。



アシュウテン
ナンショウ



杉尾峠からゴールの林道へ

自然と文化について学ぶこと

1班 西村 彦二

シニア自然大学校に入学して3年目を迎えます。本科と高等科でそれぞれ1年間を多くの仲間と楽しく過ごしました。また自然に対する感動も経験しました。特に高等科での沖縄への修学旅行では、亜熱帯のめずらしい樹木を実際にこの目で観察することができたのは感動的でした。というのは、広い世界にはどんな樹木があるのか興味があり、半年ほど前からアジア、ヨーロッパ、南・北アメリカ、オセアニア、太平洋諸島、アフリカの代表的な都市の街路樹や自然公園などで見られる樹木を調べ始めたのですが、これらの内のいくつか、例えばデイゴ、プルメリア、モモタマナ、ギンネム、パンノキ、ホウオウボク、トックリキワタ、ウラジロエノキ、南蛮サイカチ、ナンヨウスギなどを沖縄で実際に見る事ができたからです。

今、興味を持っていることがいくつかあります。そのひとつは、15～17世紀の大航海時代にアメリカ新大陸やアジア(旧大陸)の植物、たとえば中南米のトウモロコシ、サツマイモ、ジャガイモや、またインドや東南アジアのコショウやチョウジ(香辛料)が、どのようにしてヨーロッパへ持ち込まれ、また日本へやって来たのか、南米原産のパラゴムノキ(天然ゴムの原料ラテックスを採る木)やキナノキ(マラリアの特効薬キニーネを採る木)が何故東南アジアのマレーシアやインドネシアで栽培されるようになったのか、そこには興味深い歴史のドラマが隠されているような気がします。もうひとつの関心事は、「食べる」ことです。米、小麦、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモなどの食材を世界の人々がどのように料理して食べているのか。インド料理でカレーと一緒に食べるナンやイタリア料理に欠かせないパスタは大好きですが、中国のマントウ(コムギの蒸しパン)、東欧のママリガ(トウモロコシの練り粥)、スペインのトルティージャ(ジャガイモのオムレツ)、南米のパレジェナ(ジャガイモの揚げ物)などにも挑戦してみたい！今年は「人と植物・食文化」を自分の勉強のテーマにしたいと思っています。



(揚げたマントウ)

北雲雀きずきの森

4班 遊上 眞一

阪急電車宝塚線 雲雀丘花屋敷駅の1km北に、石切山という標高284mの低い山があります。以前はその北側山麓に、花屋敷ゴルフクラブがあったのですが、住宅地を造成する計画があり、1972年に三田へ移転いたしました。

しかし、宅地造成は一向に行われず、ずっと放置したまま、都市再生機構が保有していました。

そこに地元の住民が、宝塚市に土地取得を働きかけ、市が28畝を取得。管理をまかされた長尾台小学校区のまちづくり組織 コミュニティひばりが、整備をすすめてきました。

そして今春、自然緑地「北雲雀きずきの森」として、開場いたしました。きずきの森には、400本以上の桜の木があり、またコナラ・アカマツ・ツツジの雑木林、フェアウエイ跡の原っぱ、フユイチゴの群落、小川や池、湿地など多様な自然があり、野ウサギやキツネ・タヌキなどが棲み、年間100種類近い野鳥も観察できます。

きずきの森のネーミングは、自然の移り変わりを感じ学ぶ「気づき」自然に親しみ楽しむ「木好き」より良い自然緑地や地域を作りあげる「築き」の思いを込めて、つけられたのだそうです。

この森を紹介し、自然を感じ、親しんでもらおうと、毎月第1土曜日に自然観察会を開催しています。リーダーは現在11名。全て地元の方で、中学校の理科教師、森林インストラクター、日本野鳥の会会員、昆虫博士など豪華・多彩なメンバーが揃っていて、いつも感心しています。

早くも 定例会以外に、地域の小学校や子供会、よみうり文化センターなどからも、自然観察会の依頼が入って大賑わいです。私も、豊かな自然を次代に伝えられるリーダーを目指して、仲間と一緒に奮闘中です。



(立派な看板が出来上がりました)

自然と文化科に入会して

3班 柰三 文作

高等科を修了するが、さてその後どうしようかと思っていたときに、自然と文化科の武田尾公開観察会があることを知り、参加しました。自然と文化？はて何をするとところかとの思いがありました。

4月初旬の総会後の班会議でいきなり班長をしてくださいとは大変驚いたものです。何をしたらよいのかもわからずまた、班の方々の名前と顔が一致もしていないのに班長をすることとなり、頭は混乱状態です。しまったこんなところに入るのではなかったと正直思ったものです。しかし、班の方々は親切な人ばかりで、おかげで今日まで何とか班長としての仕事をしてきたつもりですが・・・？

驚いたのはそればかりではなく、箕面自然観察会を担当するのは、8期と7期の者がすると決まっていたことです。

高等科の時に個人的に京都植物園や私市植物園に何度も訪れ特に樹木について自分なりに勉強もしていたので、どうにかなるだろうとの思いで引き受けました。しかし、正直不安もありましたので、下見の観察会をしていただけたことは、大変ありがたかったです。

観察会下見で教えていただいたおかげ、不安も少しは払えました。その後、一人で箕面に行き観察をしました。下見で教えていただいたのが、どこかに消えてしまい、不明な樹木が頭の中を駆け巡りました。この木はなんだったかな？？頭の中が真っ白

観察会の3日前の25日に、再度8期の人たちと箕面に行きました。観察をしている中で教えていただいた樹木等の名前が頭の中によみがえってきました。

28日の観察実施中に教育実習生から質問がありました。「どうしたら早く植物の名前を覚えられますか？」「簡単に憶えるための方法はありません。何度も繰り返し現地を訪ねて植物を見ることですね。」と答えました。



(5月14日に見つけた ムベ)

自然と文化科誕生

後藤 銃吾

「自然と文化科」は現在科員総勢 84 余名で、研究科中最大人数を擁している。活動内容も非常に充実しており、他の研究科の範ともいえる存在になった。この素晴らしい研究科はどのようにして育っていったのでしょうか。

平成 15 年の秋、シニア自然大学本部で講座生の終了後の受け皿として 3 研究科の新設を画策された。これを受け、松田 AS (現副代表理事) から高等科修了生を核にして、新研究科の立ち上げを打診された。高等科修了後の身の振り方を考え始めていた矢先のことでこれに飛び乗り、設立の準備に取り掛かった。児玉さんには全面的にバックアップをしていただき、また、多くの高等科 2 期在籍生の賛同をいただき、研究科設立は順調に進展していった。

新研究科は何を目指すか、科名は何にするかから決めていかなければならなかった。科名については NPO 本部から「自然と文化科」はどうかという打診があった。人手の加わっていないものは自然であり、人手が加わったものは文化であると理解すれば、なにをしてもこの範囲内であるので、受け入れることにし、活動内容は走りながら考えていくことにした。

研究科のカリキュラムをどうするかが最大の課題であるが、月 4 回の活動は、共通講義に加え自然と文化科主催の講演会を実施することにし、残る 2 回は近隣の自然観察・ハイキング・歴史文化の見学などでなんとか収まると考えた。

新研究科の代表は、高等科 2 期生の中で長老で指導力があり、全員をまとめていく適任者として古川祐司さんをお願いすることになった。古川さんは当初固辞しておられたが、松田さんの熱心な勧誘により引き受けていただいた。「自然と文化科」の科員は高等科修了生に限るという案は古川さんによるもので、新研究科が同窓会的になっては困るという本部の強い抵抗にもめげずに押し通された。

しかし、古川さんは自然と文化科の代表を 1 年で辞任され、私が後を引き継ぐことになった。私は当初からの月一回の公開講座を以後も継続し、今日に引き継がれている。また、「自然と文化科」の活動方針も明確化し、月次計画にも明示するようにした。OG 自然観察会など社会貢献活動も実施し、平成 19 年度には箕面の調査活動を開始し、研究科としての体裁も漸次整えていくことができたのである。

リレー随筆

人生の岐路での出会い

宮阪 信次

私たちが人生の歩みを振り返ったとき、ある人との出会いが人生の岐路を変えたんだと懐かしく思い出すことがあります。私自身 3 人の人を挙げるができます。その 3 人とは、小学校時代の谷脇豊先生、学生時代の遠藤勇牧師、企業戦士時代の富久登先輩です。今回は、「何くそ先生」谷脇先生のことをとりあげます。私は、戦中派生まれで、6 人兄弟の 5 番目、現在の河内長野市千代田に 8 歳まで住んでいました。当時はど田舎で、小さい借家で 8 人過ごしていました。村の医者とは当時の私のことを、いつも鼻たれ小僧で、遊んでばかりで、大丈夫かなと心配していたそうです。近畿地方にジェーン台風が来た時、大被害を受け、父が大阪府の役人をしていたおかげで、現在の大阪市中央区知事官舎近くに引越しました。田舎っ子が都会に来て、順応できない典型のような子供時代だったといえます。不器用で、学業も劣等生で中の下ぐらいでした。4 年生から 6 年卒業するまで谷脇先生が担任になり私の人生を大きく変え、今の私に变身することができたといえます。主要科目はすべて今流の「がんばろう」で、唯一「計算」だけはよくでき、それを授業中にほめてもらいました。「くそがつくものにはろくなものはない。くそつたれ、鼻くそ、耳くそ・・・しかし、「何くそ」だけはちがう 何くそと思って努力し頑張ればいつか成果が出てくる」というのが先生の口癖でした。木片に彫刻刀で刻み、長い間机の上に置き、ロずさんだものです。卒業後、今まで、幾多の人生の荒波、試練にも、逃げず取り組んでこられたのは先生の出会があったからです。40 年目の同窓会が先生宅で行われ、当時のことを話したら、「そんなことがあったか・・・」先生の眼はやさしく微笑んでいました。翌年、先生は肺がんでお亡くなりになった。人と人との出会いを大事にしたいものです。

ナラメリンゴフシ

児玉 勝久

今年の5月、所属する*MNCの定例観察会や、高等科の野外研修で新緑が眩しい五月の森を歩いていて、数回コナラの幼木の枝先などに3〜4cmほどのリンゴ状の実がなっているのを見かけました。触ってみるとやや固いスポンジ、あるいはマシユマロのような感触でした。皆さんもこんな経験はないでしょうか？

後日、調べてみると榊芽林檎五倍子(ナラメリンゴフシ)というナラリンゴタマバチによって作られた虫コブ(虫えい・ゴール)であることが分かりました。この虫こぶはナラメリンゴタマバチ(雌)が交尾後、コナラの根に榊根玉五倍子(ナラネタマフシ)を作り、そこから冬に羽化した雌が単性生殖でコナラの冬芽に産卵し、それがこのような虫コブを形成するとのこと。形成された虫コブは卵の揺りかごであり幼虫にとっては餌となっているようです。コナラの冬芽をこんな風に変形させてしまうのですから自然界は不思議ですね。

虫コブは古くから人に利用されてきました。良く知られているようにマタタビの実(マタタビミタマバエ)の作る虫コブ(マタタビミタマフシ)ができて初めて価値あるマタタビ酒用の果実になるといいます。また、ヌルデ(白膠木)の若芽や若葉などにヌルデシロアブラムシが寄生してできる虫コブ(ヌルデミミフシ:五倍子)は、お歯黒、染め物、薬、インク、占いなどに使われてきました。特に染料としては、空五倍子色という伝統色で、古代より珍重されてきていることは有名です。

虫コブは、ダニ類、アブラムシ類、タマ蜂や線虫類などの虫によって物理的刺激を受けて植物の生長を促進する物質(植物ホルモンやアミノ酸など)の分泌によって形成されるとは言われていますが、虫類にとってはともかく、寄生される植物側には何のメリットがあるのでしょうか？ 良く見かける栗の木に寄生するクリタマバチの虫コブなどは明らかに有害であることは分りますが、多くの虫コブは特に植物に害を与えている様には見かけられません。

なお、広義の虫コブと言われているものの中には細菌、菌類によっても作られるものもあります。例えば、コナラの枝などに黒褐色のコブ状の塊を見たことがありますか？ あれは虫ではなく、菌の寄生によるものです。これ等は虫コブとは区別し英語の GALL(ゴール)といった方が適切かもしれません。この種の植物寄生菌類の多くは果樹や野菜に多大被害をもたらすものばかりとのこと。

現在、日本では 1400 種以上の虫こぶ、ゴールが見

つかっているそうです。実に奥が深い世界ですね。

コナラリンゴは、この時期里山のあちこちで見られます。山歩きの際はちょっと気にしてみてください。しかし、見た目は美味しそうでも中には虫がうじゃうじゃ入っているの(リンゴのようでも食べない方がいい)と思います。(*MNC ムコネイチャークラブの略)

*なお、ムシコブの命名法は原則的には「植物種名」+「植物の部位」+「虫こぶの形状」+「フシ」とするのが普通。上記の「ヌルデミミフシ」のように部位が省略される場合もありますが、表題の「ナラメリンゴフシ」は(コ)ナラの冬メに出来たリンゴのようなフシが名の由来です。



斑入りのユリノキの不思議

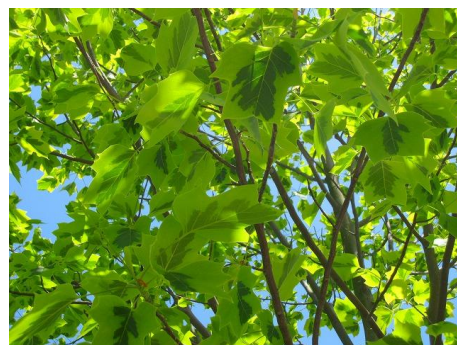
馬場 昭子

先日5月18日枚方山田池公園で珍しい斑入りのユリノキを見ましたのでみなさんいもお見せしたくお知らせします。

他でもこんな斑入りのユリノキを見られた方がおられるでしょうか？

なぜか？ご存知でしたらお知らせください。

公園南口(藤阪側)を入りに両側に十数本づつの



並木になっている内の右側の2本が、上から下まで全部斑入りの葉っぱが付いています。他の木はどこにでもあるユリ

ノキです。

昨年も毎月ほどこの入り口から入っているのですが全く気がつきませんでした。

不思議でしたがとってもきれいでしたよ！

俳句サロン
コーナー

三浦 節子

タンポポが挨拶したよ起き上がり
ヤブツバキ葉っぱの裏でかくれんぼ
新茶飲み故郷思い涙ぐむ
いつの間にスギナになった土筆の子
千枚田手植えの田植え懐かし

松平 吉生

代掻や伊吹を離(か)るる雲一片
新緑のもこもこもここあつ魚影
やうやくに花に呆くる齢かな
夜桜や簪挿して蛇も出よ
チューリップ耳剥ぐやうに散りにけり
大空に松の雌花のまるきかな

山上 恵子

花粉症咲きしミモザの黄を厭ふ
竹伐るや蠟の灯りの醸す夢
手を炙る座禅草にある温度
山野草集め今年の春を食べ
一茶見しお練りや今日の春の風
念仏を唱へて春のお練りかな
咲き競ふ雀の帷子百羽分

牧野 能子

もやの中柄の紅花浮かびけり
二人づれ箕面の山の柿若葉
すれ違う緑の中や夏帽子

大森 美子

鯉のぼり水田(みずた)に降りて泳ぎおる
カタクリの光とともに反り返る
茜背につばめ埒に帰りけり
花筏テントムシ(テントウムシ) 乗せ海原へ
田の畦は今満開の芝桜
九頭竜の万緑(バンリョク) 写す湖面かな

谷坂 修二

スカンポで青空のぞく節かじる
シロダモの産毛がひかる銀若葉
目に痛い緑がもえる登山かな

岡田 進

雨あがり霧があやなす若緑
風のなか皆うつむいてやまぼうし

絵画・写真・工作
コーナー

絵手紙コーナー

中川恵美、山下勝弘、宮阪信次は、浅野塾(高等科6期)で絵手紙を学んでいます。浅野塾は8人のメンバー、月一回浅野宅で開催され、季節の植物や風物に励ましの一言を付けて作品の一部をホスピス病院に送り、患者の人たちを和ませています。



(宮阪 信次)



(中川 恵美)

写真コーナー

ユキノシタの花はきれいです。



(記録: 谷川 稔)

工作コーナー



谷坂さんの特別作品

(シュロの葉一枚で鳥?)

自然と文化だより
皆様のご協力により5号が発行出来ました。
次号をお楽しみに！(宮阪)